信じられない日常

六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
信じられない日常

【Ｎコード】
Ｎ７３７２Ｂ

【作者名】
六

【あらすじ】
神など信じない～占いが結果が気にくわないので、そういう類のもの嫌いになった俺そんな俺の周りで起きる信じられない日常生活

file：01

「えぇ～今日の占いマジ最悪なんだけどぉ～」

占い？フン！馬鹿馬鹿しいな

俺は小さな頃から、そういう類の物を信じなくなった

俺の名は赤井剛（あかいたける）　１７歳

自分で言うのも、難だが天才である

自称ではなく実力もあるのだ

この俺が何故占い…、基そういう類の物を信じなくなったのか？

それは…

小学校一年生位の時に占いが良かったのに、良くない事が次々と起きた…

―笑い事ではない

俺にとっては深刻な事

「まぁ、あの時は俺も愚かだったからな！」

そう…、その日以来占いとか見なくなった

つーか、神なんてのは以ての外

あと幽霊もな

この世の中に科学的に立証出来ない物は無いのである

「さて力説は置き、俺は学校なんで早速登校する、遅刻だけはイヤだからな」

生まれてこの方、遅刻を一回もした事がない…

自分で言うのも難だが、優秀なのだ…

「几帳面な俺だからな…」

途中俺を呼ぶ声がした

「あかい〜」

「よぉ」

「何だよ朝からつれないなぁ…」

「こいつは光太陽生粋のバカだ」

「お前誰に話してんの？とうとう頭可笑しくなったか？」

まぁこんな感じの付き合いだ幼稚園からの付き合いだからな

でもこいつは俺が占いとか神様を信じなくなった理由を一番よく知

っているからな

何時ばらされても、可笑しくないのに…

「もしもし～赤井さん、着きましたよ～」

「あぁもう着いたか」

考え事してると時間が早く進むな…

俺の通う学校はその辺にある中流高校

部活もそこそこ盛んらしい…

そもそも全国大会にでたとか、無いけどな

「さてと、じゃあ昼な」

俺とアイツはクラス違うのだ

俺のクラスは変わったクラスで、周りの連中がおかしい？奴らなのだ

「その上光のクラスは、ちょう優秀なクラスだからな…」

そこの中にずっといても、バカな光

「勉強する気にならないもんかね…」

そんな感じで毎回クラスに向かう

さて…早く席について勉強でもする…

バチーン

教室に入ろうとすると突然、左前方から野球ボールが飛んできたのだった

「嗚呼…今日も始まんのかね？」

続く

file：02

「あっ！悪い悪い～」

ボールを投げた張本人が誤りに来た

「佐伯…、野球は外でな…」

「おぅ！もう少しで消える魔球が完成するんだよ～」

こいつは佐伯小次郎（さえきこじろう）　魔球マニアと言うか、漫画の見すぎなだけだ

第一こいつの開発してる魔球は消えるボールだ

まずそんな魔球が投げられたら、俺はノーベル賞とれるぜ

「赤井～！ボール受けてよ～！」

「授業始まるんだぞ！」

「難い事言うなって！」

「仕方ないな…」

まぁ天才的な頭脳を持つ俺様なら、授業受けなくても出来るからな

佐伯は足早にグランドに出ていった

「早いな…」

俺と佐伯はタイプが違うのかもしれないな

俺は理論的な感じたし、あいつは情熱的っつうか？

「おーい早くしろよ！」

「へいへい」

俺は佐伯からキャッチャーミットを受け取った

そうそう、これでも俺は野球をやっていてポジションはキャッチャーだったのだ

「じゃあ行くぜ～」

佐伯がマウンド上で大きく振りかぶる

投げたっ！

ボールは螺旋状に回転しながら、ミットに収まる

さすが野球部のエース！ストレートは速いなぁ

「球走ってんなぁ～」

「まぁ待て！まだ魔球投げてないぞ～」

また大きく振りかぶる

投げたっ！

ボールは真っ直ぐミットに吸い込まれていく…

……

ただのストレート…

「佐伯……」

呆れて物も言えない

「いいか…、俺が投げるからな…」

佐伯は渋々とマウンドから降りて、俺がマウンドに上がった

「佐伯…、バッターボックスに入れ…」

こいつは投手だけど良く打つって噂だからな…

「いくぞっ！」

投げた！

俺はボールを山なりに投げたのだ

実はこれにはトリックがあるのだ…！

「へっ！赤井そんなんじゃ、俺を打ち取れな……！？」

ブンっ！！

「ストライクだな…」

「球が消えた…！？」

佐伯は目を丸くして考えている

消えたのではない、簡単な事だ

これは太陽をバックにして、山なりボールを投げるとバッターはまずボールを目で追うので太陽と重なるようにすれば…

でもこれ、少しでも太陽と重なる時間が遅れると効果無いんだな

「なぁ赤井！教えてくれ！頼む！」

「自分で考えなさい」

あんなの人に教える代物でない、恥ずかしいぞ

「おい赤井～！」

俺は嘆いている佐伯をほっといて、教室に向かった…

全く！野球部が弱い訳が分かった

佐伯かストレートしか投げれないからだ

ストレートしか投げれない高校球児なんてそうそういないって言うか、絶対いないだろ

でもストレートだけで勝てるんだろうか？
むしろストレートの方が魔球じゃないのか？
そんな感じで頭の中を整理して、クラスに戻り授業を受けた
「眠いなぁ…」
教室に着くなり、机に突っ伏して睡眠をむさぼった
……
……
……
「赤井っ！」
誰だよ…！ちょうどいい感じになってたのに…
「なんだ…、パワプロ君ではないか…」
「なに寝ぼけてんだよ～！それより完成したんだよ！」
「プラモかぁ～、良かったな」
「魔球だよ！ま・き・ゅ・う！」
目を輝かせているな…

玩具買ってもらったガキかよ…

「仕方ないな…受けるよ…」

渋々とグランドにでる

「一球だけだぞ！」

「いくぞ～」

大きく振りかぶって

投げた！

その時だった

俺は何かの衝撃と共に吹き飛ばされた…

「いってぇ…！？」

なんと俺のミットにボールが入っていた

球を見てなかったわけでない

球が見えなかった…

「フフフ…、これが俺の『ウルトラスペシャルダイナミック（中略）サンダーボール』だぁ！」

一つ言っておきたいことがあった

名前聞くのに３０秒かかったぞ
「待て！何だよそれ！」
「フフフ…！教えないぞ」
いや…投げ方とかじゃなくて…
なんでナックルボールみたいに揺れてストレート投げれるんだ…
「じゃあ～もう一回な」
と言って佐伯は振りかぶって投げた
今度はボールを見逃さない…
佐伯の投げたボールは凄い音をたてながら、左右に激しく揺れている…
ストレートと変わらないスピードだ
「ここからどうな…！？」
なんとストレートと同じスピードで球が落ちたのだ…
ホームベースの手前で…
つまりさっきの衝撃はワンバンボールの衝撃だったのだ
俺は無論それに反応出来ずに顔面にボールが…
ガーン

その場に俺はたおれこんでしまった

……

「うわっ！」

……

ボールが当たった部分を確かめる

だがアザ一つ無い

どうやら俺は夢を見ていたらしい

「実にいやな夢だった…」

周りを見ると誰もいない

時計を見ると

「１６時４８分」

と示していた

下校時間になっていたのか？

光に悪いことしたな

昼飯の約束忘れていた

まぁいいか…

「つーかこのクラス、誰一人として俺のこと起こさなかったんだ？」

疑問を抱えつつ、今日も一日が終わった

続く

file：03

まぁさっきの夢はある意味イヤだった

何度も言うが、俺は科学的に証明出来ないことは嫌いなんだ

「さて、本屋に行って参考書でも買うかね」

俺の住んでいる町は凄い便利な町で、歓楽街、商店街やらがある

年頃の高校生には勿体無いがね

「いらっしゃいませ～」

本屋につき、目当ての参考書を…

「あれは…」

そこには眼鏡をかけた女の子がいた

俺のクラスの委員長、高原里穂（たかはらりほ）　さんだ

どっちかと言うとおとなしめの子で成績はまぁまぁだったかな

まぁ天才の俺には関係ないしなぁ…

「あっ赤井君…」

こっちに気づいたみたいだな

「よぉ…、相変わらず勤勉な事で…」

「うん…、弁護士になりたいから」

「弁護士かぁ～」

「赤井君は将来の夢あるの？」

ある程度予測していた事だからな

「俺は…」

あれ？何がやりたいんだっけ？

つーか、そんな事考えた時あったっけ？

将来の夢？希望？

今までの俺はいったい…？

「赤井君？」

「はっ？俺はいったい…」

倒錯してたのか？何れも今日は体調が悪いのだろうな？

「そろそろ帰ろうかな…」

「そうしたら家まで着いていくよ～」

「いいよ…、迷惑かけたくないしな…」
しかしさっきの本屋での出来事は何だったんだろうか？
精神的に不安定になったんだろうな
しかし将来の夢かぁ…
考えたことなんか…
「俺っていったいなんなんだ…」
悩む俺とは裏腹にただ時間だけは無惨にも過ぎていった
「あれ？家の鍵無いな…」
考えてる時に落としたか…
ちっ！仕方ないか…
来た道を戻るか…
キラキラした物が落ちてる
「ラッキー！」
学校に落としてたら、たまったもんじゃないからね～
「さて帰る…」

ドカーン！

目の前が砂煙でおおわれる

何かが目の前を吹き飛んだ感じだなぁ…

午前中にもこんな事あったっけ…

「ククク…それで終わりか？」

声をする方へ顔を向けるとそこには、昔にテレビアニメで見た怪人に似ていた（うろ覚え）

「イタタタ…」

こっちの声の方はどうやら正義の味方？となるとあっちは悪役？

「あっいけない！君大丈夫？」

「大丈夫って、お前高原じゃないか？」

明らかにそっくりさんではすまされない位似ていた

「私は高原じゃありません！正義の味方ゴッデスアテナですよ」

うん！一言言いましょうかね？

怪しい名前だな！

「さぁ覚悟はいい？怪人サイダー！」

怪人の名前飲み物なんだな…

「月よ！私に力を！」

どこかで聞いたような…、完全にパクリと言わんばかりだな

「月光ビーム！」

「ウギャャャャ」

まてまて人間がビーム打てる訳無いぞ

かめはめ波なんてのも以ての外だ

気合いとかでビーム出せる訳無いし

「今どうやって出したの？ビームどうやって出したんだ？」

「月の力ですよ～！」

「（｜＿｜＃）」

「では！」

といっていってしまった…

あれ？なんでこんなありえない事ばっかりなんだろうか？

いったい俺は…

「うわっ！」

起きあがるとどうやら家の前で転んでいたらしい？

「鍵は…？」

鍵と何かの紙切れだろうか？

「いつもあなたと共に…」

全く意味が分からない！

いったい何なんだ？

今日は早く寝るとしよう

続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7372b/

信じられない日常

2010年12月13日06時27分発行